

## 視点

# つぶやきを掬<sup>すく</sup>って

俳人・エッセイスト 夏井 いつき



「何歳ぐらいから俳句は作れるのでしょうか」こんな質問をよく受けます。「言葉が話せるようになれば誰でも作れますよ」と答えると、とても信じられないという顔をなさいます。

俳句はたった17音です。子どもたちのつぶやきは全て俳句の種です。子どもたちとの会話から、俳句はどんどん生まれてきます。

さなちゃんは3歳。おばあちゃんと俳句を楽しんでいます。「今度のお題は『秋の蝶』、秋のちょうちょさんよ。何かお話し聞かせて」とおばあちゃん。さなちゃんは思いつくままにお話を始めたそうです。「ちょうちょさん追いかけたら逃げていった」と、公園で見かけた蝶の話をしていたさなちゃんが、突然「ほしはゆっくりうごくけど」とつぶやいたのだそうです。さなちゃんのその言葉を掬<sup>すく</sup>いとったおばあちゃん。素敵な句が生まれました。

あきのちょうほしはゆっくりうごくけど / さな

宇宙の悠久の動きである「ほし」と、死を拒絶するように飛び回る「あきのちょう」の対比は、一句の世界に深い奥行きを作ります。「あきのちょう」も「ほし」も時間の長さは違いますが、いつかは滅びていくもの。静かな滅びの影を読み取ってしまうのは、読者である私たちの深読みではありますが。

たくみ君も3歳。俳句を始めたばかりのお母さん、5歳のおにいちゃんと一緒に俳句作りをしています。お母さんが「名月」という季語に挑もうと、句帳を片手に唸っていました。お母さんは何か発想のヒントが欲しくて子どもたちに話しかけます。「ね

え、名月って知ってる?」「お月さま!」と答えるお兄ちゃんの横で、たくみ君はなぜかダイオウイカの話を始めただそうです。「あのね、あのね、ダイオウイカの目はおおきい!」この言葉にハッとしたのがお母さん。それってスゴイ!と我が子の言葉に感動して書きつけたのが、この一句です。

めいげつやだいおういかのめはおおきい/たくみ

この俳句にはお母さんのコメントが添えられました。「名月とダイオウイカの取り合わせってなかなかないですね。しかも名月の丸くて大きな感じと、ダイオウイカの目。夜空のイメージと深海のイメージ、悪くないんじゃない?!」

お母さんの鑑賞もまた素晴らしい! 「名月」はただの満月ではなく、一年に一度の仲秋の名月を愛でる気持ちを含んだ難しい季語です。「だいおういか」という名前との堂々たる取り合わせが天晴れ!そして3歳の息子のつぶやきに詩があることをキャッチできるお母さんもまた、天晴れです。

3歳から6歳ぐらいの子どもの場合は、「俳句を作る」というより、さまざまな体験をお話するところに「俳句の種」が生まれるという言い方が正しいでしょう。子どもたちの言葉に耳を傾け、つぎつぎにこぼれてくる「俳句の種」を掬ってやること。「今の言葉ステキ!」「書いとかないと勿体ないね」と大人が誉めてやるのが、子どもたちの意欲を育てます。言葉が育てば、心が自ずと育っていきます。子どもたちの言葉に耳を傾けてやって下さい。その豊かな時間に、俳句という名の詩が生まれてくるのです。